

秋の陣 9月 その1

来年度末に予定されている、センターテストから共通テストへの制度変更は、昨年度の受験に早くも大きな影響を及ぼしていたことが、少しずつ分かってきました。さらに、そのことに追い打ちをかけるような文部科学省の指導(大学入試において、入学者を募集定員の1.2倍までに抑える措置)が、様々な影響を及ぼしたのも事実です。

例えば、明治大学の政治経済学部合格できなかったが、東京大学の文Ⅱに合格できたり、東洋大学の経済学部合格できなかったが、早稲田大学の政治経済学部合格したりという個別の案件がネットにあげられているのを確認しました。たくさんある中での一つの例であるといえそうですが、そんなことがあるのかと驚いたこともありました。

受験大学を選択するときに、偏差値ではなく大学の実績や教授や就職実績などを考慮するという事は、前々からよく言われていることではあります。しかし、偏差値によって選択することが以前より不確定という時代だということにより、そのことばかりで済ませるわけにもいきません。

自分の得意不得意の科目のバランスと、大学入試における教科科目の配点とともに、合格ラインをきちんと確認して、過去問との相性等を鑑みながら、大学の魅力とともに選択をしていくことが大切なのだと思います。

また、受験生の流れの見極めも大きな意味を持ちます。例えば、今年の春においては、福島大学等への北関東圏からの志向がかなり強くなった結果、合格最低点が上がるという現象が垣間見られました。経済学部系の東京近辺の私立大学への志向が倍率が高いことを踏まえて、危険を伴うということにより、センターを受験した結果、首都圏ではなく地方国立大学に風向きが変わるということが起こったということです。

といっても、その変わり目の影響を受けたのは、ボーダーの人々なのであり、トップ層から中位の受験生にとってみれば、第一志望であることにより学習を重ねていけば大きな影響はないというのも現実です。

右往左往する必要はないが、首都圏の私立大学については、センター併願で合格できる可能性はかなり低くなったのは現実であり、きちんと国立大学の二次対策とともに私立大学対策をしていく必要があるということは明らかです。

結論から言うと、入りたい大学にトップ層で入りましょうということです。そのために、できることを惜しまず、準備を着々とこなしていくことが、必ず花が咲くための大きな手立てとなるのです。

